

特集：日常診療でみられる精神症状と心身症

【巻頭言】

大 森 哲 郎 (徳島大学神経精神医学教室)

森 井 章 二 (徳島県精神保健福祉協会)

精神疾患はまれなものではなく、実は頻度の高い病気である。人口のおよそ1%の人が精神分裂病を発症し、およそ10%の人が一生のうち一度は病的うつ状態に陥ると言われている。神経症やストレス関連で生ずる軽度の精神疾患や老年期の痴呆を合わせると、精神疾患は誰もが陥るありふれた病気とみななければならない。

精神疾患は様々な身体的な愁訴を通して表現されることがあり、また心身相関メカニズムによって様々な身体的な症状を出現させることがある。したがってプライマリーケア場面においてこれらの症状に遭遇することは日常的なことである。実際、世界保健機構(WHO)による最近の調査は、一般病院各科を受診するもののうち20数%までが何らかの精神的問題を抱えていることを明らかにしている。

したがって、日常診療においてみられる精神症状や心身症に適切に対応することは現在の急務であり、21世紀の医療福祉において一層重要性を帯びる課題かと思われる。本企画においては、次の5つのテーマを取り上げた。

- 1) 小児科でみられる心身症
- 2) 摂食障害
- 3) 軽症うつ病とパニック障害
- 4) 更年期女性にみられる精神神経症状
- 5) 痴呆の基本的な診かた

幸い、それぞれの分野において精力的に診療や研究に携わっておられる5人の先生方が演者を務めて下さった。演題順に、二宮恒夫先生(徳

島大学医療技術短大)、宮内和瑞子先生(宮内クリニック)、井上和臣先生(鳴門教育大学)、安井敏之先生(徳島大学医学部産婦人科学)および大塚智丈先生(高瀬町立西香川病院精神科)である。時間の制約のなか、手際よく解説していただいた先生方に心から感謝申し上げる。

演題は、1)から5)の順に、小児期、思春期、成人期、更年期、老年期とおおまかにライフサイクルをカバーしたつもりである。しかし、各年代においてみられる精神症状と心身症は、それらに限るわけではなく、取り上げることのできなかつた重要な問題がいくつも思い浮かぶ。たとえば、癌の治療過程で生ずる様々な精神身体的問題、ターミナルケアに伴う心理的問題、慢性疼痛、アルコール関連障害、代謝性疾患や内分泌疾患に伴ってみられる精神症状、脳神経疾患に伴う精神症状、リハビリテーションに伴う心理的問題などである。このほかにも臨床各領域にはそれぞれに固有の心身医学的疾患が存在すると思われる。精神科サイドからみても、他科と連携するリエゾン精神医療は今後発展させなければならない大切な領域であり、各科のお役に立てるよう努力する所存である。

本企画がひとつのきっかけとなり、より多くの先生方が精神症状と心身症に関する診療にこれまでも増して関心を寄せられ、身体のみならず心の病にも苦しむ方々の治療が一層発展することを念願する。